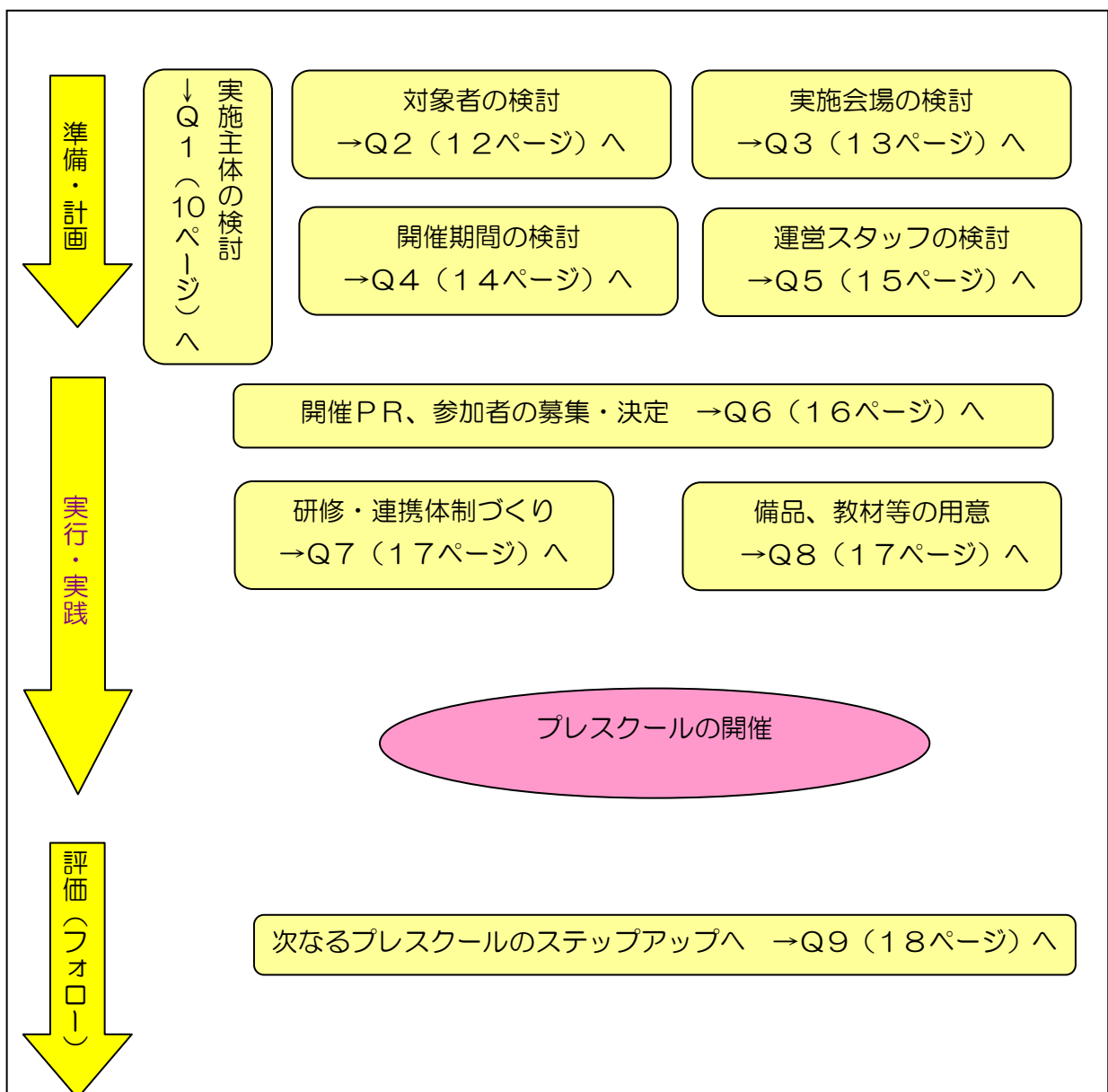


第1章 プレスクール事業を企画・運営する際のポイント(Q&A)

プレスクールは、子どもの成育にかかわる大切な事業ですので、「準備・計画 (PLAN)」、「実行・実践 (DO)」、「評価 (SEE)」のプロセスを踏まえた仕組みづくりがとても重要です。

本章では、プレスクール事業を企画・運営する際のポイントについて、「Q (想定される疑問点) & A (アドバイス) 方式」でわかりやすく紹介していきます。プレスクール事業は、このような流れですすめていくとよいでしょう。



Q1 どのような組織がプレスクール事業の実施主体となりますか？

プレスクール事業の実施主体としては、市町村の「教育委員会」、「多文化共生担当課」、「幼稚園・保育園担当課」のほか、「外国人支援団体（国際交流協会など）」などが考えられます。

考えられる実施主体には、それぞれにより点と課題点が考えられます。下記の表を参考にし、プレスクールが実施される地域の実情に合わせて最も効果的な実施主体を検討しましょう。

	よい点	考えられる課題点
教育委員会・ 学校教育担当課 (小学校含む)	<ul style="list-style-type: none"> ・就学（小学校入学）後の指導と連動した指導ができること（小学校担任教員との連携や調整） ・指導者など人材に関する情報が豊富 	<ul style="list-style-type: none"> ・他機関との連携や調整
多文化共生担当課	<ul style="list-style-type: none"> ・他機関との連携や調整 ・外国人住民に関する情報が豊富であること 	<ul style="list-style-type: none"> ・就学前指導に関する経験 ・指導者などの人材確保
幼稚園・保育園担当課 (幼・保育園、外国人向け託児所含む)	<ul style="list-style-type: none"> ・在園児の指導時間・場所を柔軟に確保できること ・園児の情報が指導計画に反映できること 	<ul style="list-style-type: none"> ・不就園者への対応 ・指導者などの人材確保
外国人支援団体 (国際交流協会など)	<ul style="list-style-type: none"> ・多言語の情報や外国人住民に関する経験や蓄積が豊富 ・多言語に対応できる人材確保 	<ul style="list-style-type: none"> ・運営資金の確保 ・住民に関する情報（個人情報）の扱い

どの組織が実施主体になった場合でも、プレスクール事業を進める上では、幼稚園や保育園、小学校、庁内の各関係課、外国人コミュニティなど、他機関・他組織との連携・協力がとても必要となります。こうしたことから、実施主体は、プレスクール事業のコーディネート（調整・調和）を図るため、担当者をコーディネーターとして明確に位置付けるとよいでしょう。なお、このコーディネーターは、プレスクールの指導者とは求められる能力等が異なるということからも、プレスクールの指導者とは別にした方が効果的です。また、コーディネーターは個人情報を取り扱うことが多くあるので、その点にも十分配慮する必要があるでしょう。

＜コーディネーターに期待される役割＞

- ・就学前の子どもに関係する機関・組織（プレスクール事業の実施主体、教育委員会、幼稚園、保育園、外国人向け託児所、小学校、保護者等）における連絡・調整、本マニュアル（特に序章・第3章）に関する共通理解の形成
- ・プレスクール事業に関する各種問い合わせなどへの対応
- ・プレスクールの指導者・通訳者・協力者に対するサポート
- ・プレスクールに参加する子どもとその保護者に対するサポート
- ・プレスクール事業に係る評価（フォロー）の実施（報告会開催、報告書とりまとめ等）

Q2 どのような子どもがプレスクールの対象となりますか？

プレスクールの対象者は、「外国籍の子ども」と国籍で限定するのではなく、日本国籍の子どもを含めた「外国にルーツを持つ子ども」と設定した方が、実態に即した有益な事業となるでしょう。

「外国にルーツを持つ子ども」とは、外国籍の子どものみならず、国際結婚した夫婦や帰化した外国人の子どもなど、外国の文化的・言語的背景を持つ子どもを示します。愛知県に暮らす外国人の子どもの言語や文化的な背景はとても多様化していることから、外国籍の子どもに限定しない方がよいでしょう。愛知県に暮らす外国人の子どもの場合、幼稚園や保育園に通う子どもだけでなく、外国人コミュニティ内にある外国人向け託児所に通う子どもや家庭内で過ごしている不就園の子どもも少なくありません。とりわけ不就園の子どもは、集団生活の経験が日本の幼稚園や保育園に通園する子どもより少ないことから、小学校入学後に学校生活上で不安を抱えることが多い傾向にあります。愛知県に暮らす外国人の子どもの現状については、序章1「就学前の外国人の子どもの現状とプレスクールの必要性」（1ページ）を参考にしてください。

プレスクール対象者を設定する際には、こうした外国人向け託児所に通う子どもや不就園の子どもを対象者として考えていくことがとても重要です。なお、こうした子どもを把握するためには、事前に十分な調査が必要です。

なお、プレスクールの告知・参加者の募集にあたっては、国籍や在留資格などへの配慮が必要です。また、不就園の子どもに対する告知・募集を行う際には、外国人コミュニティ（外国人住民がよく利用する商業店舗など）や外国人住民の支援団体などと協力して準備するとよいでしょう。

<愛知県モデル事業から、実践例の紹介>

○不就園の子どもの実態把握の方法（知立市の事例）

知立東小学校校区に暮らす不就園の子どもを把握するため、知立市に暮らす次年度小学校入学年齢に相当する外国籍住民の状況を把握しました。

- ① 9月1日時点の外国人登録者数では、42名が該当しました。
- ② そのうち市内にある幼稚園・保育園に通っている子どもは18人でしたが、19人が不就園であることが明らかになりました。
- ③ この不就園の子ども19人については、訪問調査を実施し、子どもの就園実態について把握しました。その結果、7人について状況把握ができ（12人は帰国や転居のため居住していなかった）、プレスクールの案内などを行いました。

Q2-2 外国人児童生徒でも日本語が普通に話せるのでプレスクールは必要ないのではないのでしょうか？（※2010年（平成22年）8月に追加）

日常生活で日本語が話せると判断されても、学校生活が日本語でできるとは限りません。教室の中でのやりとりは、家庭や保育園でのやりとりのように1対1のコミュニケーションではなく、1対多であり、しかも、「教室談話」と言われる特殊なものです。また、学校生活での基本（手を挙げて発言する等）も身につけなければなりません。

日本人児童の場合、こうしたことは親が教えたり、親との会話の中で自然と身につけていきますが、外国人児童の場合は、こうした機会があまりありませんので、こうしたコミュニケーションスタイルに馴れさせることがプレスクールの目的の一つとなります。

Q2-3 日本人児童と一緒に教えてはいけないのでしょうか？

（※2010年（平成22年）8月に追加）

母語の違いや文化的背景の違いは大きいので、日本語が母語でない外国人児童に対する指導内容と、日本語が母語の児童に対する指導内容は同じではありません。

しかし、日本人児童がいる方が、学校生活の現実に近いので、異文化適応能力や異文化共生の力を養うのに役に立ちます。また、日本語は先生から習うのではなく、日本人の子どもとの楽しい遊びを通して学ぶのが、この年齢の子どもには一番自然で理想的な形ですので、日本人児童に特別に参加してもらうことはプラスになると思います。

ただ、気をつけなければならないのは、日本人の子ども的人数が多くなり、日本人が優勢になると、日本語ができない外国人児童は、自信喪失につながってしまいますので、あくまでも、自己イメージにプラスになる形で、日本人児童との意味のある交流の場とする必要があります。

日本人児童もプレスクールの対象として、外国人児童と日本人児童の混合クラスで行う場合であっても、クラス全体でできる楽しい活動に加えて、外国人児童に対するグループ指導や個別指導は必要です。なるべく全体活動でクラスの一員であるという帰属意識を与えながら、上記の趣旨を踏まえ、グループ指導や個別指導を通して、外国人児童の特別なニーズに応えるように、配慮していただきたいと思います。

Q2-4 プレスクールとは、ひらがなを書けるようにすることなのでしょ うか？（※2010年（平成22年）8月に追加）

プレススクールとは、ひらがなを書けるようにすることが主目的のように思われるかも知れませんが、文字の指導だけでなく、読み書きの基礎の力も教えようとしています。日本人児童の場合は4-5歳くらいから本の読み聞かせなどを通して文字にも興味が出てきて、話し言葉に加えて読み書きの世界にも自然に入っていく、1年生になったときには、ひらがなも大体読めるし、自分の名前も書けるという状況になります。これに対し、外国人児童は、話し言葉から読み書きにスムーズに移行していく言語環境がないので、プレススクールという形で、人為的に読み書きの入り口のところを丁寧に教え、なるべく日本人児童と同じようなレベルまで引き上げて1年生を迎える必要があります。

文字は話し言葉の力を支えにして習得されるものです。ひらがな文字を書くだけなら繰り返し練習すれば短期間で書けるようになるかも知れませんが、この文字を使って日本語の単語や文を書き表すことはできません。日本語を聞く力と話す力、つまり日本語が使えないと文字を人とのコミュニケーションに使えません。従って、プレススクールでは、話し言葉を強めながら文字も教えるという方針になっています。

読みに必要な力は、音と文字とを対応させる力です。例えば、「りんご」は「り・ん・ご」の3つの音でできていて、それぞれに文字があるということです。こうしたことは、日本語を母語とする人には自然なことですが、アルファベットを使って表記すれば、R・I・N・G・Oと5文字を使うことになり、しかも、音の固まりとしては、“RIN”と“GO”の2つと認識されるのに対し、日本語の場合は3つの音でできていると認識され、それが3つの文字で示されます。

こうした音韻意識を日本人児童は「しりとり」等の遊びを通して自然に身につけていきますが、外国人児童の場合は、そうはいかないので、いろいろな遊びや指導を通して、日本語の音韻意識を高めるという特別な介入が必要となります。

また、Q2にありますように、プレススクールは、学校生活でのコミュニケーションや読み書きの基礎の力を身につけてもらうことも目的となっています。プレススクールの目的を整理すると以下ようになります。

- 1 基本的な生活指導
- 2 日本語指導
- 3 読み書き（リテラシーの基礎）
- 4 集団生活に馴染める
- 5 学習レディネス（*）を高める *あることを学習するために必要な土台。学びのための条件
- 6 自分の気持ちをコントロールする力を養う
- 7 日本人教師とコミュニケーションする力を養う
- 8 日本人児童、外国人児童と付き合う力を養う
- 9 日本の学校文化に適応する

Q3 どのような施設がプレスクールの実施会場になりますか？

プレスクールの会場としては、「幼稚園・保育園・外国人向け託児所」「公共施設」「小学校」などが考えられます。

考えられるプレスクールの実施会場には、下表のとおり、それぞれよい点と課題点が考えられます。下記の表を参考にし、会場の設定にあたっては、プレスクールの期間中に会場を移動したりする必要のない、プレスクール参加者が集中できる環境づくりを最優先にして選定しましょう。

なお、いずれの場合でも、子どもに適切なサイズの机・椅子は必要です。

	よい点	考えられる課題点
幼稚園・保育園・外国人向け託児所	<ul style="list-style-type: none"> ・当該幼稚園・保育園・外国人向け託児所に通う子どもは移動を伴わない 	<ul style="list-style-type: none"> ・当該幼稚園・保育園・外国人向け託児所に通う子ども以外の参加が難しい（特に不就園の子ども） ・会場を複数設定する場合、指導者は移動を伴う
公共施設 (公民館、公営住宅の集会所など)	<ul style="list-style-type: none"> ・会場を一か所にする場合、指導者の移動を伴わない ・対象者を限定せずに不特定の希望者が参加できる 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園・保育園・外国人向け託児所に通う子どもが参加者の場合、移動を伴う ・時間の設定や調整が難しい
小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・会場を一か所にする場合、指導者の移動を伴わない ・対象者を限定せずに不特定の希望者が参加できる ・入学後を想定した体験を取り入れた指導ができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・時間の設定や調整が難しい

<愛知県モデル事業等から、実践例の紹介>

<図表1 プレスクールの実施会場（知立市・小牧市・半田市・豊橋市・西尾市の事例）>

	知立市	小牧市	半田市	豊橋市	西尾市
	2006、2007 (平成 18、19) 年度	2006、2007 (平成 18、19) 年度	2008 (平成 20) 年度	2008 (平成 20) 年度	2008 (平成 20) 年度
幼稚園				○(1園)	○(2園)
保育園	○(2園)		○(4園)	○(1園)	○(4園)
外国人向け託児所				○(1所)	
公共施設				○(県営住宅 集会場)	
小学校	○12月は小学校(1校)で行っていたが、1月から保育園へ変更(2006(平成18)年度) ○学校見学・体験授業(全3回) ○不就園の子ども	○(1校)		○学校見学(全8回)	

Q4 プレスクールの開催期間はどのくらいの期間が適当ですか？

プレススクールの開催期間は、プレススクール事業の実施主体の人員や予算などの運営上の問題をはじめ、プレススクールに参加する子どもの在日年数や家庭環境、生活経験などにより異なります。

本マニュアルの第2章4「指導計画を作成しましょう。」(31ページ)を参考にしながら、プレススクールの開催期間を設定するとよいでしょう。

なお、愛知県モデル事業及び西尾市「多文化子育て支援事業」のいずれも、12月～3月までの4カ月間において、プレススクールが開催されました。

Q5 プレスクールを運営するためには、どのようなスタッフが必要ですか？

プレススクールの運営のためには、プレススクール参加者に対する日本語指導・学校生活指導を行う指導者が必要です。

プレススクール参加者は、日本の小学校の入学予定の子どもであることから、指導者にまず求められる資質として、日本の小学校の状況を理解している人（もしくは経験している人）が考えられます。とりわけプレススクール参加者は、文化的にも言語的にも多様な背景を持つ子どもでもあるので、一方の文化や習慣を押し付けず、異なる文化や習慣を尊重できる考えの持ち主であることも重要な点です。

しかしながら、「指導者」という立場から、子ども同士に大きな害が及ぶような場合には、「なぜだめなのか」をきちんとその理由を子どもに伝えることができる指導力も必要でしょう。

なお、指導者がプレススクール参加者の言語について堪能である場合が望ましいですが、運営スタッフとして通訳者・協力者を配置しながら指導を進めていくことも十分に可能です。

また、指導者等の人数については、第2章4（2）「クラス編成」（32ページ）を参考にするとよいでしょう。

<愛知県モデル事業等から、謝金や指導者の募集条件に関する実践例の紹介>

1 愛知県モデル事業の場合（公立学校早期適応指導員）

謝金：1日（7時間）19,600円＋愛知県規程による交通費

応募条件：・日本語指導の専門教育を受けている、又は外国人の子どもへ日本語指導・適応指導の経験（1年程度）を有すること。

・ポルトガル語を母語とする子ども及びその保護者とポルトガル語でのコミュニケーションが可能であること。

2 西尾市多文化子育て支援事業の場合（外国人児童コーディネーター）

給与：月額＝254,100円・日額＝11,550円・時間給＝1,490円＋通勤手当（月額＝4,400円に準ずる）

※外国人コーディネーターの給与には、プレススクール以外の業務に係るものも含まれています。

Q6 どのようにプレスクールのPRや参加者の募集をしたらよいですか？

プレスクールのPRは、当該市町村の教育委員会が行う新1年生の就学手続き手順とその時期なども参考にしながら行うと、とても効果的です。

案内文については、第2章3(1)「プレスクールの案内を作成しましょう。」(23ページ)を参考にするとよいでしょう。

なお、プレスクールの参加費については、対象となる子どもの家庭の経済状況を含め、様々な要素を総合的に考慮して判断すべきでしょう。

新1年生の就学手続き手順とその時期について、知立市、小牧市、半田市、豊橋市、西尾市の事例を紹介します。

	知立市	小牧市	半田市	豊橋市	西尾市
1 就学時健診案内のための名簿作成	10月1日	9月初旬	10月1日	10月1日	8月15日電算打ち出し、各小学校へ送付
2 就学時健診案内の送付	10月中(12日頃)に市教委から送付	9月下旬	10月上旬	10月3日頃以降	10月1日各小学校へ送付、各小学校が保護者へ発送
3 就学時健診の実施	11月上旬～中旬(11月1日～20日頃)	10月中	10月20日～11月20日頃	10月10日～11月10日頃	10月～11月
4 入学説明会	2月1日からの1週間	2月中	2月～3月初旬	2月上旬～3月上旬	1月～2月

<プレスクールの参加費の考え方について、西尾市の実践例の紹介>

2008(平成20)年度に公私立保育園・公立幼稚園の就学前の在園児を対象にプレスクールを実施しました。プレスクール参加費の金額設定については、プレスクール参加者全員が市内にある幼保育園児であったので、保育園・幼稚園を利用するための保育料等を納めていること、プレスクール自体が初等義務教育課程への導入円滑化を図るための公教育的性格を帯びていること、そして、外国人家庭は生活弱者層が多いことを鑑み、無償としました。

Q7 効果的な運営のためにどのような事前準備が必要ですか？

プレスクールでの活動を担当する指導者をはじめ、通訳者や協力者に対して、プレスクールの組み立てに取りかかる前に、事前にこのプレスクール実施マニュアルを活用するなど、研修を実施することが重要です。

特に、第2章「就学前の外国人の子どもへの学校生活指導・日本語指導の進め方」（19ページ）で紹介されている聞き取りや活動の進め方についてしっかりと習得することは、質の高いプレスクールを行うために有効でしょう。

研修の内容として、プレスクール実施マニュアルの活用方法のほか、当該市町村に暮らす外国人住民の現状理解、子どもの指導についてアドバイス等を受ける機会の確保、日本語指導に関わるリソースルームの見学（あいち国際プラザ、愛知教育大学外国人児童生徒支援リソースルーム）などが考えられます。地域で活躍する外国人支援団体やボランティア団体の方々とも協力しながら、研修内容を考えるとよいでしょう。

また、プレスクール開始前に、プレスクール参加者の幼稚園・保育園をはじめ、入学予定の小学校の担当者などに対して、プレスクール開催に関する情報等の周知を図ることも、プレスクール参加者の今後の成育を考えていく上でとても重要です。

Q8 プレスクールの運営のためにはどのような備品等が必要ですか？

プレスクール事業に必要な備品等としては、指導者・通訳者・協力者、コーディネーターの業務上で必要な備品、教材を作成するときに必要な備品、プレスクールの活動時に必要な備品等があります。

<愛知県モデル事業等から、実践例の紹介>

	必要な備品等の一例
業務上で使うもの	机・椅子、パソコン（メール等）、プリンター、電話・FAX、コピー機、文房具など
教材を作成するときに使うもの	文房具（鉛筆、色鉛筆、マジック、ハサミ、画用紙等）、学習教材・書籍など
プレスクールの活動時に使うもの	黒板・ホワイトボード等、CDプレイヤー、お箸、文房具（子ども用ハサミ、ファイル、マジック、連絡帳等）など



Q9 次なるプレスクールのステップアップを図るために、どのようなことをするとよいですか？

新1年生のクラス編成会議前までに、プレスクール報告書を作成し、関係者（特に、プレスクール参加者が入学予定の小学校関係者等）に対してのプレスクール実践報告会を開催しましょう。プレスクール参加者が入学予定の小学校関係者にとって、プレスクールの実践内容等は、就学指導を考えていく上でとても参考になります。

また、夏休み前までにプレスクール参加者の就学の様子を追跡調査すると、次年度のプレスクール事業のレベルアップに効果的です。